

71 / 508

5巻

5-7

しおりを挟む

↑

↓

視力が回復した俺が見たのは、姿勢を崩して膝を突く識さんの首を掴むライドウ先生の姿。

「参りました」

その光景を肯定する識さんの声が聞こえた。

思わず溜息が漏れ、脱力感が全身を襲う。それは俺だけじゃなかったみたいで、みんな一斉に体から力が抜けたようだ。

ライドウ先生が識さんの首から手を離し、俺達に視線を向ける。

模擬戦闘の前なら、何ということもなく見返せたはずのその視線が、今の俺にはとても恐ろしく感じられた。思わず、一瞬だけ合った視線を俺の方から逸らしてしまった。



「次回も来るかどうかは、君達に任せる。何よりも強くなりたいと思うなら、歓迎する」

書かれた文字の微かな魔力にさえ怯えそうになる自分に愕然とする。こんな、こんな存在がいるなんて。

……世界は、広いんだな。

ライドウ先生は振り返ることもなくフィールドを去って行ってしまった。

俺は決めた。言われるまでもない。彼の教えが今の俺には間違いなく必要だ。

「結局、お互いの自己紹介だけになってしまった感がありますが、これで今回の講義は終了です。複数の属性を扱うことや詠唱を工夫するといった講義方針でも、効

果はあるのだとわかってもらえたかと思います。……おや、どうしました？」

識さんがライドウ先生の代わりに俺達に講義の終了を伝えてくれた。束ねていた髪も解いている。さっきまであんな激しい戦闘をしていたというのに、識さんは穏やかな微笑みを浮かべていた。

魔術師だけど、俺よりも優れた近接戦闘能力を持つ人。識さんに対しては畏れより素直に尊敬の気持ちが湧いてくる。二人とも、凄い人には違いないけどな。

識さんの言葉と視線につられてそちらを見ると、同学年の女子が一人、左腕の肘の下辺りを右手で押さえていた。押さえた右手の下から赤い血が筋を描いている。

「いえ、何でもありません。ちょっと」

「さっきの模擬戦闘で何かの破片がぶつかりましたか」

そのくらい避けろよ、と思った。

あ、でも。最後の光の中で聞こえた悲鳴。あの瞬間に飛んだ破片なら避けられなくても無理はないか。視界ゼロだったからな。

でも識さんの言葉に恥ずかしそうに傷を隠すのは、多分回避できなかったのは自分がトロかったからだと思っているからだろう。あいつも奨学生組だから、プライドが高いんだよな。

「あの、本当に大丈夫ですから……あつ」

「それは私が診て決めます。私はこう見えても治療に心得がありますから」

そう言って識さんはそいつの腕を手にとると右手をどけさせて傷の具合を確かめていく。当たり前のように傷口と血に汚れた右手を魔術で出した水で洗淨する識さん。この人、水も扱えるのかよ……。

それに治療の心得？ 凄すぎて言葉がない。

「浅い切り傷のようですね。大事には至らないでしょう」

「あ、はい。ありがとうございます」

「この程度なら魔術を使うまでもありませんね。ええっと……ああ、これだ」

識さんは懷から何かを探し出して彼女に見せる。小さな瓶だ。

「特製、というほどでもありませんが手製の傷薬です。こうして傷口に塗れば――」

「ひゃう！」

「冷たかったですか、すみません言い忘れていました」

「は、はい。あ、いえ、大丈夫です……」

やり取りのあと、さらに少量の薬を傷口に塗って、全体に伸ばしていく。

「あ…」

「凄っ！」

「すげえ！」

すると、見る見るうちに切り傷は閉じ、元通りになってしまった。魔術を使うまでもって……これ、相当高価な魔法薬じゃないのか。

ん？

……手製？

製薬、錬金術の領域まで!?

ちょ、超人かよ。

「驚くほどの物ではありませんよ。初歩の傷薬に少しだけ工夫しただけの物です」

初歩？ これが？

この人の奥義とかになると、死人が起き上がっても信じられるかもしれない。

「さ、これで大丈夫。怪我をさせてしまってすみませんでした」

「い、いえ……ありがとうございます。あの、御代は」

「お礼だけで十分ですよ。この程度の薬は私どもの店でも普通に並べる有り触れた物ですし。では、また」

間違っても街の薬屋にあるレベルじゃなかったです、識さん。

識さんは治療した子の制服についた土を払ってやると、一礼して俺達に背を向けた。

ブライト先生、俺、貴方に初めて感謝します。

俺を、ライドウ先生と識さんに会わせてくれて本当にありがとうございました。

この学園に来て、俺は師と呼びたい人にようやく出会えたのかもしれない。



広大なロッツガルド学園では建物の増築や改築も盛んであるため、使われなくなり廃棄を待つだけの区画もある程度存在する。

真がひとまずではあるが講師としても商会の代表としても落ち着いたと考えていたこの時。

普段誰も近づくことのない学園の一角で、彼にとってとてもよろしくない動きが表面化しようとしていた。

「で、この金は何だ？」

「……依頼遂行の失敗による違約金です。契約の通りの額をお持ちしております」

「そんなものはいらん。まったく……講師志望の有象無象を消すのと、臨時とはい

え講師になってしまった者を消すのではかかる手間がまるで違う。暗殺者ギルドなど大仰な名前を掲げる割に、随分とお粗末な仕事をしてくれたものだな」

「……無論、該当人物につきましてはこちらで無償で暗殺を遂行致します」

「失敗した無能は当然、消したんだろうな？」

「奴はきわめて有能で実績もあるアサシンの一人。何よりこの任務に並々ならぬ意欲を見せておりますので、完遂までは使う予定であります」

「魔術師に蹴り飛ばされて武器まで叩き折られる奴がか？」

そこにいた人物は二人。

窓もない場所でうっすらと明かりを灯して話をしていた。

両者の関係は会話が示す通り、依頼者とギルド職員。

ただし内容は暗殺という極めて危険な内容であり、表に出せぬからこそこの場所での会話なのだろう。

「お言葉ですが。ご依頼にはあのような化け物が試験に混じるなど、一言も教えていただけませんでしたか？」

「講師の試験に来るのだ、皆それなりの実力者だと伝えたぞ。地方から集まる受験者全ての正確な実力など調べようもないし、その分報酬も支払ったはずだ」

「……。言い訳になりますが、かの上位竜、刃竜ミツルギの逆鱗からドワーフの匠が削り出した剣、『ツルギ』を折るような輩が相手では如何に我らとて準備が必要にございます」

「ふん。由来が本当にその通りの業物ならば、折れるなどあり得ぬと思うがな。偽物を有り難がって使っただけかもしれん」

「そのようなことは、決して。あれは奴の命。今は傷を癒やしながら怨念を深め、自らの牙を研ぎ直しているところです」

「ともかくだ。お前らは早急に今回戦術全般で通った臨時講師を消せ。今、こちらの思惑に沿わぬかもしれん奴はいらん。どうせわからんだろうがな、このロッツガルドで強い発言力を持つということは、お前などが考えている以上に重要な意味を持つのだよ」

「そのつもりではおりますが……時期につきましてはすぐに取りかかってよろしいのですか」

「どういう意味だ？」

「彼を取り込もうとする動きもされているご様子ですが？」

暗殺者ギルドの職員であろう男がのぞき込むようにもう一人の人物の目を見つめた。

「構わん。お前らがしくじった時の保険に過ぎん」

「部下の方も張り付かせておられるのに、保険ですか？」

「俺の事も知っている、という脅しか、それは？」

話を聞いていた依頼者の言葉とともに男が立ち上がった。

その雰囲気は怒りをほのかに感じさせる。

「いえ。ただの確認でございます」

「俺達と暗殺者ギルドは良い関係にある。そのままにしておきたいものだな」

「……ええ、本当に」

「……先ほど言ったように、保険だ。大体、行動を気にするようにと動かしているのは末端の司書だ。俺の顔も知らん。いざとなればまとめて消しても一向に構わん。どうせ、今となってはただの無能な女だ」

「怖い方だ……。即座に取りかかります。では」

「待て。この金も持っていけ。わずかでも仕事を上手く運ぶ為に使え」

ギルドの男の動きが止まる。

若干思考を頭に巡らせた彼は、黙って差し出された金を手にして部屋から消えた。

名前も呼び合わなかった二人の会話が終わる。

「殺し屋どもめ、図に乗りやがる。ただでさえ実技のみの試験で講師になった凄腕などと噂が広まるのを抑えるのに大分動かされているというのに、どこまでも苛つかせてくれる。奴らがまともに仕事をしていれば次の試験でこちらの息がかかった講師を入り込ませる事ができたというのに……」

一人になった依頼者の男は落ち着かない所作で髪をいじりながらその場を動かない。

思うようにいかない現状への苛立ちが全身からにじみ出ていた。

依頼に失敗し、実技講師を一名合格させてしまったというのに、暗殺者ギルドから来た男の言動は時に自分の事を挑発しているようで、それも彼には気に入らなかった。

「影で動く仕事ならばと勧められるままに暗殺者ギルドなどを使ったのが悪いとでもいうのか？ 未然に妨害したり、誰か適当に人質を取ったり、やりようなどいくらでもあるだろうに、本当に使えん奴らだ」

うっすらとした灯りに照らされた彼の服は学園でよく見られるものだった。

男は、学園の講師。

それも常勤の講師の一人だった。

だがそれは彼の本当の立場ではない。

彼が「俺達」と称したその組織こそが男の本当の立場であると言えた。

この場で暗殺の対象として語られているのは、当然ライドウこと真である。

そんな男が戦闘実技の講師を都合が良いように編成しようとして画策していた所に、真は何も知らずに飛び込み、そして思惑に反して合格を手にしてしまった。

男からすると実に面白い事態だ。

だからこそ、真が実技のみの試験で合格した事実が広まる前に、彼が持つ補助講師の枠を利用して恥をかかせ、失脚させようとした。ところが当の真自身が補助講

師として一切動いてくれない。

何一つ妨害が形になってくれない。

「……だが、リミア王国史の講義は俺が手配したものじゃなかった。実技講師に座学の講義の補助などありえん差配……俺の他にもあの新米講師を面白く思っていない奴はいるということか。ちっ、面倒事程度で済むうちに片付けておかんとな。実力がある程度広まれば、奴の試験結果についても隠しきれなくなるのはわかりきってる。妙なカリスマを発揮する前に消すか手懐けるかせんとな」

既に真の実力の一端は、奨学生を中心に知られてきている。

さらに若き商会の主としての顔も広まりつつあり、女学生も騒ぎ始めていた。

講師として、生徒からの人気を集めるのも時間の問題かもしれない。

どれも、男にとっては大いに気に入らない状況だった。

難しい顔で独り言を呟いていた男だったが、しばらく部屋で何か考え事をしていたものの、ため息を一つ吐き出してようやく部屋を後にした。

真がこの街に来て以来、ロツツガルドに暗雲が立ちこめ始めている。

彼が行くから何かが起こるのか、それとも何かが起こる場所に彼が吸い寄せられるのか。

講師としても商会の主としても、全力で平穩から逆走していることに気付いていない真だった。

3

寝たのは遅かったというのに、まだ辺りが薄暗い内に目が覚める。

講師として勤めるようになって二週間。その間ゴテツには十回行った。個人的にはしばらく鍋はいらな……じゃなかった。それは置いといて。

今日はクスノハ商会念願の、初店舗オープンの日だ。

一号店よりも先に、間借りした出張所がツィーゲにある不思議は忘れることにする。複雑な事情の中、ようやく単独で店を開くときが来たんだ。

巴と相談の上で、亜空から森鬼を二人送ってもらった。あろうことかその二人というのは僕を襲ったアクアとエリスだった。あいつの人選だから信じるけど……。

送られてきたそのときは、二人の顔を見るや否や「チェンジ」と言って人員の変更を考えただけで、本気で涙目になって二人に縫^{すが}られたので思いとどまった。

一度郊外に連れて行って魔獣と戦闘させて実力を確かめたけど、結構強くなっていた。巴と滯と、なぜかコモエちゃんの名前を出してもビクつくのが謎だけど、厳しい修練を積んだんだろうな。

仕事の内容を伝え、当座の給料を先渡ししたところ、凄く真剣な顔で忠誠を誓われた。

どうやら亜空での日々よりもここはだいぶ楽だと考えている模様。だらけないうに定期的に締めないと駄目かも。従業員が十分に確保できていない状況だから二人には結構厳しい条件を伝えたつもりだったんだけど……。

この労働条件って一日十時間労働（サビ残有り）で週休一日だよ？ 住み込みみたいなものだから一応の衣食住は保証しているとは言っても、それで喜ぶなんて亜空でどんな暮らしをしていたというんだろう。

仕事前と昼、それに仕事を終えたあとに自由時間があるとか喜んでいたり、食事は外食しても良いって言ったら泣かれたからな。亜空で独房に入れられて終日監視されていたわけでもないだろうに大げさな。

昨夜行われた、巴と澤と識、それに僕を加えた最終的な打ち合わせの結果、エルドワも二名、当日に送ってくれるという話になっている。こちらはツィーゲの出張所にも何度か行ったことのある商店スタッフ経験者らしく、素直に頼りにさせてもらうつもりだ。

初期メンバーとしては彼らと僕、それに識で全員になる。商人ギルドで面接や能力云々のことを聞いてみたら、雇ってから勉強させるのが普通で、事前に能力を確認したりはしないようだった。それどころか求人幅を幅広く実施することさえ稀なことで、大抵は紹介を経て雇われたり店主の友人や家族が従業員になるケースが多いのだとか。バイト募集、みたいな求人はこの世界では一般的ではないようだった。ギルドから人を回そうかと心配そうな顔で提案してもらったけど、ひとまずは辞退した。

そんなわけでまだまだ（僕の場合は）人数が全然足りないけど、僕がやろうとしている店の営業方針としては、十分に力のあるメンバーが揃った。

僕はこの店の特長としてまずは夜のお店の方々やそのお客さんが家に戻る深夜零時くらいまで営業しようと思っている。人が揃ってきたら常時営業のコンビニ形態を目指すつもり。幸いにもこの街で薬や雑貨を扱う店の営業時間についての規制はなかった。単にどの店も、お客の数と治安のバランスを考えて日暮れくらいの時間、この街だと十八時くらいを目安に閉店しているだけ。つまり十分な防衛力さえあれば、店を開けておくことで夜のお客さんは全部いただける、はず。ついでに遅くまでやっている薬のある雑貨屋ということで名前も覚えてもらえればラッキーかなと思ったり。

ただ零時以降のお客さんがどの程度いるのかで、本当に二十四時間営業を目指すかどうかは考えないといけないとも思っている。深夜まで頑張る人がこの世界では思ったほど多くない。ここは学園都市で特殊だとは思いますが、それでもね。

だから場合によっては夜間はデリバリーでこちらから商品を宅配したりするのも考え中。その場合は注文をどうやって受けるかを工夫しないと駄目だ。色々試行しながらにはなるけど、深夜零時までの営業はとりあえず市場調査の意味も込めて実施することにした。

……あ、そうだ。期待と言えば、メンバーはこれで全員じゃなかった。

巴がエルドワと一緒に一人使えるのを寄越すとか言っていたな。あの巴が使える、というからには期待できそうだと思う。彼女自身は僕がいた戦場の調査に向かってくれたから今日この場にはいないし来られない。澤も何やら先約があるのか、思ったほど学園都市に執着していなかった。彼女にも僕以外との繋がりができ

始めたんだろう。少し嬉しい。

サプライズ、ですから。

そう言って笑った巴の言葉と表情に一抹の不安を感じたけど……。

着替えを済ませて部屋の外へと出る。

まだ人の活動している気配のない屋内。

僕は自分の部屋のある二階部分から一階の店舗へと降りる。

そう、三日ほど前から、僕と識は宿を引き払い、他の従業員と共に居抜きで買い取った店の二階に住んでいるのだ。

二階の部屋数は六。うち僕と識で一部屋ずつ、森鬼で一部屋、エルドワで一部屋、それにサプライズ用の人に一部屋、空室一。倉庫なんかは今のところ一階でまかなえているから二階は完全に住居だ。森鬼とエルドワについては定期的に入れ替わったり亜空に戻ったりもするだろうから、実際に寝泊りする部屋として機能するかは怪しいところかもしれない。

それぞれの部屋は四～六畳程度。亜空での部屋よりは狭いけど識の内装リフォームのおかげか、なかなかセンス良く仕上がっていると思う。僕も参加していたんだけど、途中から自分の内装センスのなさに絶望して識に任せることにした。店のリフォームでも感じたけど、識は意外にこういうセンスがある。元は骸骨の癖に。

気を取り直して僕の指示と識のセンスで出来上がった店の内部をチェックしていく。昨夜遅くまでかけて陳列した商品の確認と在庫の把握。人任せにするのも気持ちが悪くて、つい遅くまであーだこーだと配置を変えてみたり、臨時で作った目玉商品の棚が動線を邪魔していないか確かめたり。

昨晚と同じことやっているなと思いながらも、繰り返してしまう。

苦笑しながら手を動かしていると、外から薄明かりが差し込んできたことに気付く。

いよいよ、かあ。

開店は昼を予定しているからまだ先だけど、それでも陽が昇ると意識が高まる。

当面取り扱うのは、識が見繕った薬関係、僕が提案してみんなが形にしてくれた栄養ドリンク、カットした南方の珍しい果物（要は亜空産だね）、それにエルドワの武具修繕。武具関連については販売を見合わせて修繕のみ受け付けてみることにした。ツィーゲで武具作成依頼が相当数になり業務を圧迫し出していると報告があったからだ。

亜空の果物をカットして原型をわからないサイズで容器に詰めた状態で販売するのもツィーゲの実績が影響していた。

果物そのものの「効能」も然ることながら、その種子に少々問題があることがわかったからだ。なので「珍しい果物が、食べやすくカットした状態でお求めいただけます」と誤魔化して、あらかじめ種子を排除して売ることにした。冷蔵などの設備面を簡単に魔術でフォローできるあたりに、科学を超えた便利さを感じたりもした。

薬については識が講義でも宣伝してくれている傷薬、汎用性の高い解毒薬、解熱や鎮痛など複数の効用がある所謂風邪薬、それに一時的に対応した能力を高める強化薬。それぞれある程度加減して辛うじて常識の範囲内に収まるレベルになっている（識談）ので安心できる。

冷静に考えると初日からお客様が溢れるというよりも、徐々に口コミで評判を得て常連さんがつくのを待つタイプの店だと思う。今日は栄養ドリンクと果物が興味本位の人を中心にでも売れてくれれば、翌日以降への種蒔きとして十分なのではと売上目標も低め。あまり大量にばら撒くと問題が起きかねないので扱う商品は一日の取扱い量を決めてある。上手くいってくれるといいんだけどね。不安で仕方ない。

今日は講義もないし、開店してからは店につきっきりでいられる。夜は垂空に行って初日の状況を巴と滯にも話しておかないとな。

外に出て店の入口上部に設置したヒノキの看板に刻まれた漢字「葛葉」^{くずのは}の文字を見る。多分異世界人の僕にしか読めない字、客が読めない店名とかマイナスではあるけどついやってしまった。後悔はしていない。上にこちらの言葉で読み仮名はつけたし大丈夫だろう。垂空には巴や滯、識をはじめ何人かは読める人もいるけど。

匂いが好きって理由だけで看板の材質を決めちゃったけど、和の雰囲気が出ていて良い感じだ。建材としての質もエルドワが褒めていたし、ヒノキって結構凄い木なのかもしれないな。

屋号の書かれた看板を見て、気を引き締めた僕は店内へと戻った。

しおりを挟む

◀ 前の話 (レンタル)

◇ 表紙へ

次の話 (レンタル) ▶

36,438

2,849

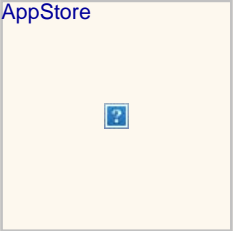
アルファポリスのアプリ



アルファポリスアプリ

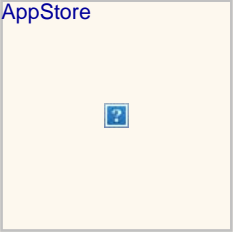
様々なジャンルの小説・漫画が無料で読める！

アルファポリス公式アプリ



アルファポリス小説投稿

スマホで手軽に小説を書こう！
投稿インセンティブ管理や出版申請もアプリから！



アルファポリス関連サービス

絵本ひろば (Webサイト)

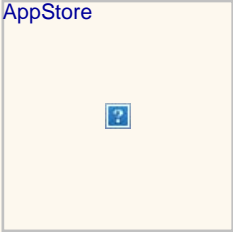
『絵本ひろば』はアルファポリスが運営する絵本投稿サイトです。誰でも簡単にオリジナル絵本を投稿したり読んだりすることができます。

絵本ひろば

絵本ひろばアプリ




2,000冊以上の絵本が無料で読み放題！
『絵本ひろば』公式アプリ。



アルファポリスのツイート

アルファカ@アルファポリスのツイート





その他のサービス	ご利用について	会社情報
<div><div><div><div></div><div>アプリ</div></div><div><div></div><div>ドリームブッククラブ</div></div></div></div>	<div><div><div><div></div><div>利用規約</div></div><div><div></div><div>ゲームサービス利用規約</div></div><div><div></div><div>アルファコイン利用規約</div></div><div><div></div><div>レンタルサービス利用規約</div></div><div><div></div><div>スコア利用規約</div></div><div><div></div><div>第三者によるCookie等行動情報の取得および利用の停止方法</div></div><div><div></div><div>ヘルプ</div></div><div><div></div><div>投稿ガイドライン</div></div><div><div></div><div>プライバシーポリシー</div></div><div><div></div><div>お問い合わせ</div></div></div><div></div><div><div><div></div><div>初めての方へ</div></div></div></div>	<div><div><div><div></div><div>会社情報</div></div><div><div></div><div>IR情報</div></div><div><div></div><div>採用情報</div></div></div><div></div><div><div><div></div><div>書店様向け</div></div></div></div>
<div>©2000-2021 AlphaPolis Co., Ltd. All Rights Reserved.</div>		